

サービ斯拉ーニングにおけるジェネリックスキルズの評価

白井 靖敏・鷺尾 敦*・原田 妙子

Assessment of Generic Skills for Service Learning

Yasutoshi SHIRAI, Atsushi WASHIO and Taeko HARADA

1. 目的

サービ斯拉ーニングは、アメリカにおける教育改革の重要な柱の一つとして、学生等を地域の諸活動に参加させる学習形態の導入が推進され、我が国でも大学教育のなかで取り入れられてきている。サービ斯拉ーニングの定義はこれまでの報告¹⁻⁵⁾で述べているので、ここでは省略するが、これを単位認定科目(正課)として位置づけることを想定した場合、その活動から学生が獲得する学修成果を明確に測定しなければならない。学修成果を明確化するには、その学修活動の母体となる地域イベント主催者やボランティア団体を含め、評価者、評価指標、評価方法などを決める必要がある。本研究では、学生が大学での授業を通して学んだ知識や技術を社会で貢献できているか、そして、学生自身が大学の教育課程のなかでは獲得が難しいスキル(ジェネリックスキルズ:ここでは汎用力として表現)をどのように、どれくらい身に付けることができたかを示す必要がある。本報告では、3年間にわたる実践研究から、後半の2年間で得られたデータをもとに、評価指標、評価方法の妥当性を検証する。

2. 経緯

実践研究の対象は、T短期大学(シニアパソコン教室等)とN女子大学短期大学部(地域貢献演習)のなかで、平成27年度は、学生に求める汎用力を、OECDのキー・コンピテンシー⁶⁾、経済産業省が示す社会人基礎力(3能力12要素)⁷⁾、文部科学省が示す学力(4分野13項目)⁸⁾を参考に、サービ斯拉ーニングで獲得し得る項目を想定し設定した。そして、評価項目ごとの重要度を、学生へのアンケート調査、および、地域団体、ボランティア協働団体のスタッフ、サービスを楽しむ参加者へのアンケート調査結果分析により策定した⁴⁾。項目毎の重要度を組み入れた評価者用ルーブリック(6能力22項目)と学生用の学修ポートフォリオを開発し、これらを使った実践(T短期大学では平成27(2015)年12月と3月、N女子大学短期大学部では平成28(2016)年1月)を行った。これらの結果から活動内容の異なる2つの実践をもとに、ボランティア協働団体のスタッフ、指導教員、学生自身が評価できていた項目を精査し、そこ

* 高田短期大学キャリア育成学科

から共通する項目を抽出したコモンルーブリック (6能力14項目) を試作した。ここまでの成果は、日本教育工学会全国大会等で報告し⁹⁻¹⁰⁾、さらに、大学紀要で公表した³⁾。

このコモンルーブリック、および、これを基にした学修ポートフォリオを用い、T短期大学で、平成28 (2016) 年7月と12月、平成29 (2017) 年3月の3回、N女子大学短期大学部で平成29 (2017) 年1月に実践研究を行った結果、信頼度の高いコモンルーブリックとして評価項目を5能力8項目に絞ることができた¹¹⁻¹⁴⁾。これらの項目は、今後、活動の異なる様々なサービスラーニングにおける「汎用力」を評価するコアとなるものと考えられ、サービスラーニングの種類や活動内容によって、当初に設定した22項目から必要に応じてコア8項目に加え、ルーブリックを作成することができる。

さらに、コモンルーブリックの汎用性を検討するため、同じ評価指標を用いた実践を、T短期大学では、平成29 (2017) 年7月と12月、平成30 (2018) 年3月の3回、N女子大学短期大学部では平成29 (2017) 年7月と平成30 (2018) 年1月の2回行った。

3. 方法

T短期大学とN女子大学短期大学部で実施されているサービスラーニングは、前者が非正課、

表1 コモンルーブリック (評価規準 5能力8項目) : 番号は当初の (6能力22項目) の項目番号

1	分かりやすく説明する力
2	文化技術等を相互作用的に活用する能力
3	相手に応じた話ができる能力 (会話力)
7	傾聴する能力 (話を聞こうとする姿勢)
8	他人と良い関係を作る力
9	他人と一緒に協力して活動ができる力
13	活動全体の意義や自分の役割を理解し活動できる力
18	自ら進んで人に問いかけたり、聞いたりする力
	規律などを遵守する力 (約束ごとなどを守るなど)

学生の自己分析項目 (16項目)

- 1 大学で学んだ知識が活かされた (知識)
- 2 大学で学んだ技術が活かされた (技術)
- 3 地域との交流のきっかけになった
- 4 将来仕事を通じて人の役に立ちたいと思った
- 5 地域や社会の課題に関心が持てた
- 6 相手に配慮しながら自分の伝えたいことが伝えられた
- 7 困難に見える課題にも挑戦してみようと思えるようになった
- 8 周りの意見を集約し、調整しながら物事をすすめていけるようになった
- 9 見通しと計画性を持って行動することができるようになった
- 10 この活動によって大学の学びが深まった
- 11 卒業に必要な単位を取得していても、今後、他の関心のある授業はとるようにしたい
- 12 自分とは異なる考えや価値観を尊重することができた
- 13 大学の授業のなかで主体的に学べるようになった
- 14 大学で学目的が明確になり、目的意識が強くなった
- 15 自分の事は自分で決められるようになった
- 16 自分で人生を切り開いていけるように感じた

後者が正課科目となっていることと、活動内容も異なる。学生が獲得する汎用力を測る評価規準・基準が、異なる学生であっても、異なる活動内容であっても妥当な評価結果にならないければ、多くの活動に適用できない。すなわち、評価規準・基準に汎用性をもたせる必要があると考えている。経緯で述べた信頼度の高いコモンスブリック（評価規準 5能力8項目）と学生の自己分析（大学で学んだ知識や技術の貢献度等16項目）を用いた実践を、T短期大学では、平成28年度（平成28（2016）年12月、平成29（2017）年3月の2回）と、平成29年度（平成29（2017）年12月、平成30（2018）年3月の2回）、N女子大学短期大学部では、平成28年度（平成29（2017）年1月）と、平成29年度（平成29（2017）年7月と平成30（2018）年1月の2回）とで比較する（表1）。両短期大学では活動内容が異なることと、年度が異なる場合は対象学生も異なる。

T短期大学では、T市中央公民館とT短期大学キャリア研究センターが共催するシニア向けの「シニアパソコン教室」に参画し活動している。活動は、T市中央公民館が募集したシニア層の参加者にパソコンやインターネットの基礎を教える内容で、地域の情報ボランティア7人～9人がスタッフとして学生とともに教室を運営している。短大教員は学生の指導者として関わっている¹⁵⁾。N女子大学短期大学部では、「地域貢献学習」の科目として、ファッションデザインと広報デザインプロジェクト、ファッションデザイン染茜プロジェクト、ファッションデザインクリエイティブプロジェクトの3つのプロジェクトにより、地域貢献行事を企画立案し、その上で地元行事と関わり、お年寄りや子供たちとのコミュニケーションや、作品の即売等を行っている。この活動には、地域主催者以外のボランティアスタッフは参画していない。40人前後の学生を小グループに分け、テーマごとに授業担当教員が指導している（表2）。

表2 N女子大学短期大学部での活動内容

	学生数	活動内容
Aグループ	8	草木染めの製作を、市域の人に教え、作品を完成させるイベントを行う。また、染色の布を用いて作品を作ることや古着のリメイクをし、地域で展示販売を行う。
Bグループ	8	草木染めの製作を、市域の人に教え、作品を完成させるイベントを行う。また、染色の布を用いて作品を作ることや古着のリメイクをし、地域で展示販売を行う。
Cグループ	12	学生の声がたくさん詰まったパンフレットの作成、周辺地域の紹介や、テーマを絞って特集を行う。対外的な活動を通して、コミュニケーション力を養う。
Dグループ	8	瑞穂児童館のクリスマスイベントでの食サポートや、企業と連携した食活動を行う。地域の方への実践活動を通して、まごころを育む。
Eグループ	6	草木染めの製作を、市域の人に教え、作品を完成させるイベントを行う。また、染色の布を用いて作品を作ることや古着のリメイクをし、地域で展示販売を行う。
(平成29年度前期)		
	学生数	活動内容
Aグループ	11	草木染の体験イベントと草木染の作品製作・展示販売(瑞穂通3丁目市場)
Bグループ	10	草木染の体験イベントと草木染の作品製作・展示販売(瑞穂通3丁目市場)
Cグループ	12	「瑞穂プロムナード」パンフレット作成 実施は随時で、完成は7月中旬
Dグループ	11	「マックスバリュートとのコラボでレシピ作成」・児童館クリスマスイベント
(平成29年度後期)		
	学生数	活動内容
Aグループ	11	古着のニットヤーンでの作品製作と展示販売 実施は瑞穂通3丁目市場
Bグループ	9	古着のリメイクの作品製作と展示販売 実施は瑞穂通3丁目市場

4. 結果

4.1 コモンルーブリックによる評価結果の比較

T短期大学およびN女子大学短期大学部におけるコモンルーブリック(汎用力5能力8項目)評価について、平成28年度と平成29年度比較を次の規準で数値化した相関関係を用いて検討する。

コモンルーブリックは、縦軸に評価規準8項目、横軸に評価基準をABCの3段階で示したマトリックで、分析には、Aを3点、Bを2点、Cを1点として数値化した。一般的に「おおむね達成されている」をBとするが、サービラーニングは学生が参加している積極性を前提としているので、標準をCと定め、「達成できていない」などの基準は設けていない。表3の自己評価は活動した学生のなかで、すべてAなどと同じ評価値を記している信頼できない回答者シートを除いた人数をもとにした平均値、スタッフは、評価に参加いただいた人数をもとにした平均値、教員および研究者(筆者)は、それぞれ1人の評価となっている。ただし、N女子大学短期大学部での活動についての教員評価は、小グループごとの担当教員をもとにした平均値となっている。経緯の項で述べたように、当初の6能力22項目から、実践結果を精査し5能力8項目に絞った結果、両短大とも、ほとんどの評価項目において高い評価結果を得ているため、汎用力を評価する項目はおおむね妥当であったと言える(表3:3段階評価の平均得点2点以上にマークしている)。

平成28年度実施と平成29年度実施との比較検討をするため、それぞれの項目に対する平均得点の相関を表3に示す。年度が異なるため学生の質的な違いがあり平均値は異なるものの、学生自身の自己評価については、比較的相関が強く、特に、正課授業としているN女子大学短期大学部の地域貢献学習では非常に強い(T短期大学 $r=0.68$ 、N女子大学短期大学部 $r=0.95$)。学生が自分の活動にしっかり向き合い、示された評価規準をもとに、自己省察をしている結果と言え、評価項目の汎用性が検証できた。一方、T短期大学でのスタッフ評価の相関は必ずしも強いとは言えない。また、教員による評価が逆相関を示していることや、各年度1回限りの研究者(筆者)評価もきわめて弱いが逆相関である。N女子大学短期大学部での教員評価も必ずしも強いとは言えない(T短期大学 地域ボランティアスタッフ $r=0.44$ 、教員による評価 $r=-0.69$ 、研究者(筆者)による評価 $r=-0.19$ 、N女子大学短期大学部 教員による評価 $r=0.47$)。さらに、N女子大学短期大学部の活動は、クラスの学生を小グループに分け、それぞれの活動に指導教員が張り付いているため、同じルーブリックを用いた各教員のグループごとの評価についての相関も、全体としてばらついており強いとはいえない(表4)。T短期大学においても、平成28年度実施では、学生の自己評価と教員による評価には逆相関の関係が示されており¹¹⁾、教員と研究者(筆者も含む)とは正相関(平成28年度 $r=0.53$ 、平成29年度 $r=0.38$)を示していることから、スタッフも教員も年を重ね、過去の経験などにより、ルーブリックの評価規準の理解にある意味固定した基準が加わった影響が出てきていると推察できる。サービラーニングに限らず、多くの大学では、グループ学習等のアクティブラーニングの質的評価にルーブリックが導入されてきているが、教員自身の評価観による影響などを検討していく必要がある課題と感じている。

表3 コモンルーブリックによる評価結果(平均2以上にマーク 相関は係数の絶対値が0.4以上にマーク)

T短期大学

(平成28年度の学生数13人の平均、スタッフ7人の平均、教員及び研究者は1人、平成29年度の学生数11人の平均、スタッフ9人の平均、教員および研究者は1人)

評価規準	3段階評価平均													
	2016.12			2017.3				2017.12			2018.3			
	A1	A2	A3	B1	B2	B3	B4	C1	C2	C3	D1	D2	D3	D4
	自己評価	スタッフ評価	教員評価	自己評価	スタッフ評価	教員評価	研究者評価	自己評価	スタッフ評価	教員評価	自己評価	スタッフ評価	教員評価	研究者評価
1	1.54	1.54	2.67	2.38	2.96	2.69	2.54	1.70	2.06	2.63	2.38	2.27	2.22	2.44
2	1.69	2.09	2.42	2.62	2.92	2.54	2.23	2.18	2.17	2.17	2.25	2.60	2.44	2.67
3	2.15	1.90	2.50	2.46	2.92	2.92	2.23	2.45	2.24	2.00	2.50	2.00	2.78	3.00
7	2.31	2.04	2.40	2.31	3.00	2.77	2.31	2.64	2.48	1.91	2.44	2.17	2.44	2.44
8	1.85	2.04	2.38	2.15	3.00	2.33		2.50	2.33	3.00	2.38	2.73	2.33	2.33
9	1.92	2.50	2.45	2.23	2.88	2.46	2.15	2.20	2.42	2.64	2.25	2.21	2.56	3.00
13	2.23	2.50	2.50	2.25	2.75	2.33	1.85	2.38	2.25	3.00	2.13	2.00	2.71	2.67
18	2.00	2.88	2.36	2.62		2.54	2.15	2.36	3.00	2.91	2.63	3.00	2.67	2.11
平均	1.96	2.19	2.46	2.38	2.92	2.57	2.21	2.30	2.37	2.53	2.37	2.37	2.52	2.58

相関関係(T短期大学)

	自己評価		スタッフ評価		教員評価		研究者評価	
	H28年度	H29年度	H28年度	H29年度	H28年度	H29年度	H28年度	H29年度
	1	1.96	2.04	2.04	2.16	2.68	2.42	2.54
2	2.15	2.22	2.22	2.38	2.48	2.31	2.23	2.67
3	2.31	2.48	2.48	2.12	2.71	2.39	2.23	3.00
7	2.31	2.54	2.54	2.32	2.58	2.18	2.31	2.44
8	2.00	2.44	2.44	2.53	2.35	2.67		2.33
9	2.08	2.23	2.23	2.32	2.46	2.60	2.15	3.00
13	2.24	2.25	2.25	2.12	2.42	2.86	1.85	2.67
18	2.31	2.49	2.49	3.00	2.45	2.79	2.15	2.11
平均	2.17	2.33	2.33	2.37	2.52	2.53	2.21	2.58
相関	0.68		0.44		-0.63		-0.19	

(N女子大学短大部)

	自己評価		教員評価	
	H28年度	H29年度	H28年度	H29年度
	1	1.93	1.92	1.84
2	2.33	2.26	2.18	2.06
3	2.43	2.30	2.08	2.24
7	2.37	2.44	2.06	2.20
8	2.61	2.49	1.87	2.17
9	2.26	2.16	1.76	2.04
13	2.10	2.10	1.87	1.88
18	2.41	2.36	1.98	2.25
平均	2.30	2.25	1.95	2.10
相関	0.95		0.47	

N女子大学短期大学部

(平成28年度の学生数42人の平均、教員5人の平均、平成29年度前期の学生数44人の平均、教員4人の平均、平成29年度後期の学生数20人の平均、教員2人の平均)

評価規準	3段階評価平均					
	2017.1		2017.7		2018.1	
	A1	A2	B1	B2	C1	C2
	自己評価	教員評価	自己評価	教員評価	自己評価	教員評価
1	1.93	1.84	1.90	2.09	1.94	1.81
2	2.33	2.18	2.23	2.25	2.30	1.86
3	2.43	2.08	2.21	2.34	2.39	2.15
7	2.37	2.06	2.33	2.13	2.55	2.28
8	2.61	1.87	2.28	2.16	2.71	2.18
9	2.26	1.76	2.06	2.12	2.26	1.95
13	2.10	1.87	2.01	2.06	2.19	1.71
18	2.41	1.98	2.32	2.36	2.40	2.15
平均	2.30	1.95	2.17	2.19	2.34	2.01

表4 N女子大学短期大学部における教員間評価・自己評価

H28 教員評価相関					
G-1	G-2	G-3	G-4	G-5	
G-1	0.41	0.12	0.27	0.26	
G-2		0.08	0.11	-0.1	
G-3			0.07	0.09	
G-4				0.44	
自己評価相関					
G-1	G-2	G-3	G-4	G-5	
G-1	0.56	0.32	0.71	0.27	
G-2		0.50	0.52	0.24	
G-3			0.50	0.47	
G-4				0.53	
H29前 教員評価相関					
G-1	G-2	G-3	G-4		
G-1	0.53	-0.28	-0.04		
G-2		-0.18	0.10		
G-3			0.56		
自己評価相関					
G-1	G-2	G-3	G-4		
G-1	0.66	0.47	0.49		
G-2		0.39	0.42		
G-3			0.46		
H29後 教員評価相関					
G-1	G-2				
G-1	0.41				
自己評価相関					
G-1	G-2				
G-1	0.91				

4.2 学生の自己分析と自己評価の比較

学生には、学修ポートフォリオとして自分の成長を確認できるように自己分析シートを毎回の活動において記載させている¹¹⁻¹⁴⁾。活動の異なる両短期大学でも同じ自己分析シートで振り返りを行っている。両短期

大学において、16項目の自己の振り返り項目に強い相関があった（T短期大学について、各回の相互相関係数の平均は $r=0.76$ 、N女子大学短期大学部について、各回の相互相関係数の平均は $r=0.75$ 、両短大の相関は $r=0.85$ ）。このことは、学生の学びの目的と自己省察においては、両短大生の違い、サービ斯拉ーニングで

の活動内容の違いは、ほとんど影響しない、すなわち、どのような活動であってもこれらの項目には汎用性があり妥当と判断できる。

学生の自己評価について見ると、T短期大学における年度の違いによる相関は $r=0.66$ 、N女子大学短期大学部の年度の違いによる相関は $r=0.95$ と強い。また、大学間では、T短期大学の平成28年度の活動とN女子大学短期大学部の平成28年度の活動との相関は $r=0.27$ 、平成29年度との相関は $r=0.39$ と弱い、T短期大学の平成29年度の活動とN女子大学短期大学部の平成28年度の活動との相関は $r=0.79$ 、平成29年度との相関は $r=0.88$ と強い傾向になっている。2年間の実践のみで断定できないが、両短期大学とも異なる年度による相関や大学間での相関が比較的強い傾向になっているのは、小学校から今に至る長年の学習経験のなかでは身に付けていなかったこと、あるいは、身に付けたと感じられなかったこと、重要性を考えたこともなかった、いわゆる「汎用力」が、サービ斯拉ーニングを通して感じとったのではないかと推察できる。したがって、評価項目が、学生が自己を振り返ったときに評価が高くなる、あるいは、低くなる傾向が同じようになるという特徴をもっていることも考えられる。

4.3 教員による評価観

先の項でも触れたが、両短大で同一のルーブリックを用い、年度の異なる学生の「汎用力」を評価した結果では、教員による評価は、学生の自己評価や地域ボランティアスタッフによる評価に比べ相関が強くない、場合によっては逆相関を示している時期もある。N女子大学短期大学部では、学生を異なる活動に対しグループ分けをして、それぞれの活動に異なる指導教員が担当している。同一のルーブリックを用いた評価において、対象学生の異なる年度間、同一年度においてもグループ間で相関があまり強くない（表3、表4）。AグループとBグループは2つの年度で同一の教員が担当した活動であるにもかかわらず相関が弱い（Aグループ：

表5 学生の自己分析（5段階評価得点の平均値）

項目 番号	T短期大学					N女子大学短期大学部			
	H28年度 12月	H28年度 3月	H29年度 12月	H29年度 3月	平均	H28年度 後期	H29年度 前期	H29年度 後期	平均
	学生13人	学生13人	学生11人	学生9人		学生42人	学生44人	学生20人	
1	3.33	3.67	4.00	4.13	3.74	3.79	3.23	3.81	3.61
2	3.33	3.78	4.10	4.00	3.75	4.02	3.33	3.92	3.76
3	3.89	4.33	4.10	4.56	4.21	4.27	3.80	3.96	4.01
4	4.11	4.33	4.30	4.50	4.30	4.04	3.67	4.10	3.94
5	3.22	3.33	3.50	3.50	3.45	3.64	3.26	3.52	3.47
6	3.22	3.33	3.50	3.88	3.51	3.77	3.30	3.59	3.55
7	3.33	3.11	3.50	3.50	3.41	3.75	3.29	3.79	3.61
8	3.00	3.38	3.40	3.25	3.24	3.68	3.30	3.27	3.41
9	2.89	3.38	3.60	3.75	3.44	3.66	3.30	3.45	3.47
10	3.67	3.78	4.00	4.25	3.93	3.76	3.35	3.77	3.62
11	3.78	4.00	3.90	3.75	3.79	3.91	3.52	4.03	3.82
12	3.22	4.11	3.90	4.00	3.86	3.74	3.52	3.83	3.70
13	3.11	3.56	3.80	3.63	3.54	3.67	3.27	3.53	3.49
14	3.44	3.67	3.50	3.88	3.64	3.48	3.21	3.45	3.38
15	3.33	3.00	3.60	4.00	3.45	3.79	3.30	3.88	3.66
16	3.00	2.75	3.50	3.50	3.27	3.36	3.00	3.56	3.31

平成28年度後期と平成29年度後期で $r=0.13$ 、Bグループ：平成28年度後期と平成29年度後期で $r=-0.07$ 。対象学生が同一の場合のみ比較的相関が強い（Aグループ：平成29年度前期と平成29年度後期で $r=0.56$ 、Bグループ：平成29年度前期と平成29年度後期で $r=0.63$ ）。

ルーブリックはアクティブな学習に対する質的な評価を数量化する機能を持つもので、より客観的な評価へ近づけられると考えているが、各実施時期における教員の評価においては相関が強いとはいえ、評価基準の妥当性に疑問が残る結果となった。こうした意味でルーブリックを基にしながらも、教員にとって、これまでの経験値（学生と接している状況等）の影響が強いのか、ルーブリックによる評価基準の設定が各教員間で共有できていない、あるいは、固定的な評価観があるのか、今後の課題といえる。

4.4 結果のまとめ（平成28年度と平成29年度）

ここで改めて、ルーブリックにおける評価規準・基準の妥当性を示す根拠として、年度の異なる学生に対して評価をする場合、学生の質的变化により平均値のズレはあり得ても、得点分布の傾向は変わらないと仮定することで、それぞれの相関が強くなればルーブリックによる評価規準・基準は妥当だと考えることとする。ただし、評価対象者が、同じ活動していても人と人とが関わるため、必ずしも仮定に従うとは限らない場合があれば、それにはどのようなファクターが関わっているかを今後の実践研究課題としていくこととしたい。

4.4.1 T短期大学

- ・年度により活動している学生は異なるが、評価基準は同一なので、基準設定が妥当であれば、学生の自己評価の相関が強い（ほぼ仮定通り）。
- ・各年度で、評価に参加したスタッフはほぼ同じで、評価基準も同一なので、基準設定が妥当であれば、評価の相関が強い（ほぼ仮定通り）。
- ・各年度で、指導教員と研究者（筆者）が同じで、評価基準も同一なので、基準設定が妥当であれば、評価の相関が強いはずが、相関が強くない（仮定に反する）。これは、教員・研究者とも大学教員なので、評価については慣れており、また、ルーブリックを作成したのも教員と研究者（筆者）で、各年度で活動学生が異なるなかで、同一ルーブリックをもとに、年度比較などは考えず、素直に学生の行動観察をして評価している。しかし、実際、指導教員は活動の運営に労力がとられ、学生のその場のパフォーマンスをしっかりと見取ることができたかという意味で課題が残った。むしろ、指導教員は、その活動に至る準備の段階から学生を指導しており、その影響も大きくあると考えられる。また、評価対象人数が少ないことで、学生の個性にバラツキが大きく、筆者についても、長年の教育経験から学生の活動の様子を広くとらえ、ルーブリックに示した基準に忠実でなかった面も否定できない（今後、ルーブリックの評価基準の表現を考える点での課題）。

4.4.2 N女子大学短期大学部

- ・各評価項目に対する実施時期による教員評価の相関は比較的強いいため、基準設定が妥当であると考えられる（ほぼ仮定通り）。
- ・各評価項目に対する実施時期による学生の自己評価の相関は、T短期大学同様に強いので、基準設定が妥当であると考えられる（ほぼ仮定通り）。
- ・各実施時期における教員間（教員A～E）の評価については、基準設定が妥当であれば、評価の相関が強いはずが、相関が強くない（仮定に反する）。
- ・各年度で、ABの2人の指導教員で、評価基準も同一なので、基準設定が妥当であれば、評

価の相関が強いはずが、相関が強くない(仮定に反する)。個々の教員で考えた場合、前項も含め、T短期大学での実践と同様、各グループ別にみると評価対象人数が少ないため、学生の個性にバラツキが大きく、教員の長年の教育経験から学生の活動の様子を普段の学習状況も含め広くとらえ、ループリックに示した基準に忠実でなかった面も否定できない(今後、ループリックの評価基準の表現を考える点での課題)。

4.5 地域スタッフによる評価の妥当性(評価方法等)

「汎用力」を評価する評価方法について、T短期大学において、指導教員と研究者(筆者)はすべての評価項目をすべての学生を対象として評価しているが、ボランティア協働団体のスタッフにはできる限り負担にならない評価方法を検討し改良を加えた。①平成27年度(研究1年目)では、スタッフ全員がすべての評価項目についてすべての学生を対象とする方法、②平成28年度(研究2年目)では、評価項目を精選して減らしたうえで、さらに、評価項目をスタッフ毎に区分けして、それぞれがすべての学生を対象とした方法、③平成29年度(研究3年目前半)では、評価項目を絞り込んだコモングループリックについて、スタッフそれぞれが評価項目を区分けしてすべての学生を対象に、キーワードを考慮した自由記述形式とし、事後に整理する方法、④平成29年度(研究3年目後半)でも、コモングループリックについて、すべての学生を対象としながら、観察できた学生のみ3段階(ABC)で記入し、加えて自由記述も加えた方法であった。これらの方法について、5人のスタッフから回答を得た。負担感の面で④が3人と最も支持され、①が1人、③が1人であった。最も評価が簡単だったものとして④が4人、③が1人、最も分かりやすかった方法として③が3人、④が2人となった。回答数が少ないので、傾向として考えると、③が分かりやすいものの、簡単さや負担感の少なさでは④の方法が勝る。

〈スタッフの自由記述から〉

- ・④の方法は、観察する意識が薄れやすかったように思います。③の方法だと負担も少なく記入意識も持ち続けられました。項目が絞られすぎると、学生の良かった点があっても、評価項目から外れていると評価できない(書くところがない)のは残念です。
- ・観察評価するためには、ボランティア活動しながらの片手間は、評価項目を十分に観察できません。無理があり不平等となる可能性があると思います。

ループリックの評価項目について、平成27年度では社会人基礎力などを含む評価用ループリック(①6能力22項目)を利用し、平成28年度と平成29年度では、前年度の研究を精査し抽出しコモングループリック(②6能力14項目)を、さらに精選したコモングループリック(③5能力8項目)に絞った。これらのうち、学生の活動を観察評価するうえで、最も適したループリックは③と回答したのが2人、②が2人、①が1人、学生の活動を観察評価するうえで、最も評価しやすかったのは③が4人、②が1人、最も分かりやすかったもので③が2人、②が2人、①が1人となった。スタッフから見て、最も重要と考えている項目はバラツキはあるものの、表1に示す項目番号8の「他人と一緒に協力して活動ができる力」と、9の「活動全体の意義や自分の役割を理解し活動できる力」が選ばれている。

評価項目を絞ったコモングループリックにしたうえで、記述を簡便化すると良いことが分かる。

5. 考 察

本報告では、平成28年度と平成29年度において、同じ評価規準・基準で比較するため、平均値の相関を求めて検討した。一般的に、たとえば知識を問う客観テストの場合、おおむね難易度を同じにした問題を選び、年度の異なる学生に対して実施している場合、クラス全体の学生の質的变化により平均点のズレはあっても、得点分布の傾向は変わらないと仮定するなら（多人数の場合は正規分布に近づく）、年度の違う得点分布の相関は強くなるはずである。逆に、年度の違う学生の得点分布の相関が強いと、そのテストの難易度を含む出題が妥当であったと判断でき、必要に応じて年次変化を分析できると考えている。

ルーブリックは、サービスラーニング等のアクティブな学習に対する質的な評価を数量化する機能を持つもので、より客観的な評価へ近づけられると考えているが、質的な評価をマトリックス形式の評価規準・基準として記載している過程において、評価者にとって、基準の違いが分かりにくい表現（似たような表現）となることは避けられない。したがって、評価者自身も過去の経験などにより、ある意味固定した基準が影響してくるので、可能な限り、だれでも同じ基準として考えられるルーブリックの記述語の工夫が必要であることは言うまでもない。平成28年度と平成29年度の2年間比較のみではあるが、学生の自己評価や自己分析では、年度による学生の違い、両短大における活動内容の違いがあっても比較的相関が強く、ルーブリックの評価規準・基準に照らしての評価がなされていたと考えられる。しかし、教員（筆者も含む）による評価のバラツキは大きく、特に、年度の違い（学生の違い）では相関が弱いことが見られた。質的な評価を数量化する機能を持つルーブリックが正しく機能していないとまでは言えないが、この原因を追及するにはデータが少ない。今後、アクティブラーニングなどの導入が進み、知識・理解、技能だけではなく、多面的な評価、特に、数量化が難しい質的な評価に、ルーブリックが活用されていくことは確実である。本研究で対象としたサービスラーニングだけではなく、様々なアクティブラーニングにおいて、数年間の実践検討が必要で、教員の評価観を見極めていく必要を感じた。

サービスラーニング（社会貢献学習）は、大学で学んだ知識や技術を社会的活動に活かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ、実践力を養うことを目的とし、それを正課の授業として位置づけているケースもあり、また、非正課として活動しているケースもある¹⁶⁻²²⁾。本実践において、T短期大学は非正課の活動、N女子大学短期大学部では正課の授業としている。それぞれの活動（授業）内容は異なり指導状況も異なる。学生は大学で学んだ知識や技術を地域に貢献し、その見返りに、いわゆる汎用力（ジェネリックスキルズ）の向上を図ることができる。

T短期大学において、成績（GPA）と汎用力（ジェネリックスキルズ）との関係を見ると、平成29年度において、汎用力の自己評価と年間GPAの相関は $r=0.38$ 、教員による評価とGPAでは $r=0.40$ とあまり強くない。また、RIASEC²³⁾が実施しているPROGテストの結果においても、コンピテンシー総合とGPAの相関は $r=0.19$ となっており、強いとはいえない。つまり、大学での学修成績が高いからジェネリックスキルも身に付いているとは必ずしも言えないのである。大学での学修のなかでジェネリックスキルズを獲得することは難しいこともあり、今後、アクティブな学び、とりわけ、学外での活動であるボランティアやサービスラーニング、企業との連携型のPBLなどの重要性が増すと考えている。また、ジェネリックスキルズを可能な限り評

価できる指標をもとにした授業デザインを正課として位置づけるのも必要と思われる。サービ
スラーニングだけという意味ではないが、ボランティア活動、正課外活動を含めた主体的・対
話的な学びの機会を多くしていく必要もある。こうした意味において、サービスラーニングの
学修成果を測る場合、つまり、正課の授業と考えたときの成績評価は、ジェネリックスキルズ
がどれだけ向上したかを見るのが中心となろう。もちろん、学生自身が自己の振り返りとし
て、大学で学んだ知識や技術をどれだけ地域に貢献し得たかを自己省察することも合わせての
ことである。

単位認定科目（正課）を想定した評価に対する考え方について、T短期大学での活動を担っ
てきたボランティアスタッフから少し意見をいただいた。

- ・ 社会に出る前の準備として、学外での活動は意義があると思います。また、社会人として求
められることに比べて、自分が得意な事、不足していることを知り、自らを改善することや、
就職活動での選択考慮の一助にもなると思います。
- ・ 一般的なペーパーテストでの評価は簡単ですが、このような活動の評価は難しい。単純に数
値化できないので、評価方法を研究することが大切だと思います。今後、この評価をどのよ
うに指導に結びつけることができるかの研究に発展していければ成果がみえてくるように思
われます。
- ・ 限られた時間とサポートをしながらの評価なので、目立つ部分のみとなり学生さんの一部
分だけで、もっと優れた部分を見逃しているのではないかと思います。ある程度継続的に
観察し評価できるのが望ましいと感じました。学外活動は将来的に社会に出た場合、この経
験がいかされるといいますので一人でも多くの学生さんが参加できる機会を設けていただ
ければと思います。
- ・ 学生の学外活動の推進はとても素晴らしいといつも感心しております。評価も適正に出来た
らよかったですと思いますが、いつも慌ただしいというか忙しい状況で、評価にまで手が回りま
せませんでした。この数年で学生さんの能力がかなりアップしていると実感しております。これ
からも学生の学外活動の推進は継続するよう祈念いたします。
- ・ また、学生同士の相互評価もいいかもしれません。そうすれば、他人を観察することにより、
自主性が芽生えるかと思えます。

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C））（課題番号15K04259）の一部である。

参考文献

- 1) 宮崎猛, アメリカにおける「サービスラーニング」の動向と意義, 日本社会科教育学会『社会科教育研究』, No.80, PP33-39, (1998)
- 2) 白井靖敏, 鷲尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおけるCOMMON RUBRICの検討, 名古屋女子大学紀要 第63号, PP.75-87, (2017)
- 3) 鷲尾敦, 白井靖敏, サービスラーニングにおけるルーブリック評価手法と学修ポートフォリオの改善, 高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報 第3号, PP.73-83, (2017)
- 4) 白井靖敏, 鷲尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおける学修成果の可視化に向けた取組, 名古屋女子大学紀要 第62号 PP.141-151, (2016)
- 5) 山田礼子, コミュニティ問題を改善しながら理論を学ぶ, カレッジマネジメント147, PP.70-73, (2007)
- 6) Definition and Selection of Competencies (DeSeCo), <http://www.oecd.org/edu/skills-beyond-school/definitionandselectionofcompetenciesdeseco.htm> (2017)
- 7) 経済産業省, <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/> (2017)
- 8) 文部科学省, 「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申, (2008)

- 9) 鷺尾敦, 白井靖敏, サービスラーニングによる学修評価指標の検討, 日本教育工学会第31回全国大会論文集, PP.809-811, (2015)
- 10) 白井靖敏, 鷺尾敦, サービスラーニングにおける汎用力評価の実践的検討, 日本教育工学会第32回全国大会論文集, PP.821-822, (2016)
- 11) 白井靖敏, 鷺尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおけるCOMMON RUBRICの有効性, 名古屋女子大学 紀要 第64号 PP.397-408, (2018)
- 12) 鷺尾敦, 白井靖敏, サービスラーニングでの利用を目指したルーブリック評価の実践と課題, 高田短期大学 紀要 第36号 pp41-52 (2018)
- 13) 鷺尾敦, 白井靖敏, 原田妙子, サービスラーニングにおける「汎用力」の評価結果の考察, 日本教育工学会第33回全国大会(島根大学)大会論文集, pp971-972, (2017)
- 14) 白井靖敏, 鷺尾敦, 原田妙子, サービスラーニングにおける「汎用力」を評価するコモンルーブリックの実践的考察, 日本教育工学会第33回全国大会(島根大学)大会論文集, ppP973-974, (2017)
- 15) 鷺尾敦, サービスラーニングで発揮される専門能力を評価するルーブリックの開発-「シニアパソコン教室」の調査から-, 高田短期大学 紀要 第34号 pp91-102 (2016)
- 16) 桜井政成, 地域活性化ボランティア教育の深化と発展: サービスラーニングの全学的展開を目指して, 立命館高等教育研究第7号, PP.21-40, (2007)
- 17) 安藤輝次, 一般的ルーブリックの必要性, 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター教育実践総合センター研究紀要17号, PP.1-10, (2008)
- 18) 濱名篤, ルーブリックを活用したアセスメント, 中央教育審議会高等学校教育部会資料, (2012)
- 19) Dannelle D. Stevens, Antonia J. Levi, (佐藤浩章監訳), 大学教員のためのルーブリック評価入門, 玉川大学出版部, (2014)
- 20) 山田嘉徳, 森朋子, 毛利美穂, 岩崎千晶, 田中俊也, 学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討, 関西大学教育開発支援センター関西大学高等教育研究 第6号, PP.21-30, (2015)
- 21) 立教大学教育開発・支援センター, 「学習成果」の設定と評価—アカデミック・スキルの育成を手がかりに—, 大学教育開発研究シリーズNO.22, (2015)
- 22) 葛西耕市, 稲垣忠, アカデミックスキル・ルーブリックの開発—初年次教育におけるスキル評価の試み—, 東北学院大学教育研究所報告集 12, PP.5-29, (2012)
- 23) RIASEC, <http://www.riasec.co.jp/progtest/test/2018.7>

要 約

本研究では、学生が実社会へ出て直接的に役立つ能力として、社会人基礎力を身に付ける意味においても重要なサービス・ラーニング(社会貢献学習)を取り上げた。そこで獲得するジェネリックスキルズ(汎用力)を評価する評価者用ルーブリックと学生用の学修ポートフォリオを開発し、T短期大学およびN女子大学短期大学部において3年間の実践研究および検証を行った。結果、当初設定した6能力22項目から汎用性の高い5能力8項目のコモンルーブリックと、それを用いた学修ポートフォリオが作成でき、その効果が実証できた。また、大学教員による評価に加え、学生の活動に関わる地域スタッフによる負担の少ない評価方法も確認できた。

As a subject of our research, we chose service learning which enables students to acquire generic skills immediately useful in real life. We have developed a learning portfolio for students and a rubric for evaluators who evaluate generic skills, which are important in terms of fundamental competence for working persons. We have selected 8 items in 5 abilities out of 22 items in 6 abilities and decided a general-purpose common rubric and

a learning portfolio after practical research for 3 years and its verification at T.Junior College and College of N.Women's University. These evaluation methods proved to be less burdensome for the community-level volunteers involved in student activities as well as for the faculty of the University.